

農 大 情 報

平成25年 1 月号

編集発行：愛知県立農業大学校

農学科の卒論発表会を行いました

1月11日(金)午後1時から卒業論文発表会を開催しました。

この行事は、教育部農学科の修業期間2か年にわたるプロジェクト学習の成果を卒業論文にまとめ発表するものですが、他の専攻の学習内容を知る良い機会でもあります。また、この発表会は、「平成24年度東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会」(以下「ブロック発表会」という。)への代表選考会を兼ね、運営は



各専攻代表の発表者

学生会の1年生役員があたりました。

全校学生及び教職員でいっぱいになった大講義室で菊池陽貴君の司会で発表が進められました。

発表は、農学科の各専攻代表の2年生8名により行われました。いずれも、入学以来取り組んできたプロジェクト研究の成果を、パワーポイントを用いて立派に発表していました。

会場内では2年生はもちろんのこと、1年生もプロジェクト研究に取り組み始めており、関心が高く熱心に聞き入っていました。

審査は、校長先生はじめ5名の審査員が

「発表内容」、「発表方法及び態度」、「質疑に対する応答」の審査項目に基づき行い、最優秀賞1名、優秀賞2名が以下のとおり選出されました。

【最優秀賞】

「イチジクの接ぎ木による品種更新手法の検討」(果樹専攻 石口祐希)

【優秀賞】

「もろみペレットを混合したTMRが産乳性に及ぼす影響」(酪農専攻 田頭勇人)

「シクラメンの摘葉が副芽の発生に及ぼす影響」(鉢物・緑花木専攻 佐野公彦)

(中村哉志)

県民公開講座で白菜と大根のキムチ作り

今回は受講者28名が地元産の白菜と大根を使ったキムチの加工実習を行いました。まず大きな容器でニラやパイナップル、調味料を混ぜてキムチの素を作り、次にそれを参加者ひとり一人が、塩漬けた白菜の葉の間に丁寧にはさみこみ、完成させました。熟成するまでは3日間ほどかかりますが、講師の用意してくれた熟成後のキムチは辛さの中にこくがあり、味見をした参加者から好評でした。



キムチは白菜や大根だけでなく、キュウリやカブでもできること、キムチの素は炒め物、焼きそば、鍋ものなどの料理にも利用できることを学びました。簡単にできて応用範囲が広いと、家でもぜひ作りたいという声が聞かれました。

(玉越千賀子)

イベント残金を東北復興支援に寄贈

昨年12月に行った農大祭2012では、学生会が新企画として東北復興支援の取組みを行いました。この取組みに必要な資金を寄付で募ったところ、予想を大きく上回る多くの善意が寄せられ、計画を達成することができました。1,080,442円のイベント残金については、中日新聞社会事業団へ東北復興のための寄付金として託しました。

なお、決算の概要は以下のとおりです。

収入

個人寄付	1,323,000円 (188件)
協賛金	290,000円 (32件)
その他	192,123円 (東北産品売上等)
計	1,805,123円

支出

事業費	673,292円 (3県学生招聘、東北産品販売等イベント費)
事務費	51,389円 (通信費等)
寄付	1,080,442円 (中日新聞社会事業団)
計	1,805,123円

茶の新製品開発に向けた研修を実施

1月17日(木)に茶生産農家と関係者73名の参加を得て愛知県茶業連合会との共催で専門高度化研修(「あいちの茶」の振興方策)を行いました。

あいち産業科学技術総合センターの中茎秀夫氏の講演では、「凍茶(とうちゃ)」の製法や特徴が紹介されました。

凍茶は、昨今のお茶離れに伴う需要の減

少による経営の低迷を打開する方策として、樹形を整えるために大量に捨てられていた秋季整枝葉を活用して講師が新しく開発したものです。

凍結することにより揉捻工程を省くことを可能にした発酵茶で、煎茶や紅茶とは異なる新たな飲み物として期待されます。



あいち産業科学技術総合センター中茎秀夫氏の講演

続く静岡県農林技術研究所の大宮琢磨氏の講演は、緑茶に興味はあるが飲み慣れていない人のために、おいしく手軽に淹(い)れることのできる鮮やかな緑色の新しい粉末緑茶について、その開発経緯や普及に向けた取組が紹介されました。

少しでもお茶に親しんでもらい、お茶離れを防ぎたいとの強い熱意が伝わる講演でした。

講演の後も、受講者と講師の話は尽きず、とても有意義な研修となりました。

(稲吉金一)

冬休みにアーク溶接研修を実施

研修部では農業者を対象とした各種の農業機械研修を実施していますが、冬休みに入った12月25日(火)から27日(木)までの



3日間、アーク溶接研修が行われ、農業者21名と農大生13名が受講しました。

アーク溶接は、金属材料と溶接棒に電気を流し放電を行わせ、発生する高熱で金属材料と溶接棒を溶かして融合させる溶接法です。溶接速度がとても速く、接合部の強度も高いため、農業機械の修理、棚の作成など、農業現場でもよく使われる技術です。

溶接には、紫外線、火傷、感電といった危険が伴うため、受講生は牛革製の手袋や前掛け、足カバー、保護面、防じんマスクといった保護具で身を固めて作業に臨みました。

最初のうちは、満足な出来映えとはいえない溶接の仕上がりも、保護面越しにアークの状態を確認しながら、溶接棒を、分厚い手袋をして微妙に動かし繰り返すうちに、農大生も修了時には見違えるほどきれいに溶接ができるまでになりました。

(福田充洋)

陸上部が岡崎市市民駅伝に出場！

岡崎市民駅伝（岡崎市教育委員会主催）が1月20日（日）に開催され、農大陸上部が一般の部に出場しました。

岡崎市総合公園を午前10時にスタートし、岡崎の市内をほぼ一周する6区間29.9kmのコースで競う一般の部には、136チームが、さらに中学・高校の部など全部合

わせると過去最多の254チームが参加しました。

農大チームは一般の部で参加をしました。豊川工業高校（岡崎市内在住の生徒で構成）や三菱自動車といった日本を代表する強豪チームが参加する中で苦戦したものの、目標の全員完走ができました。

駅伝は、襷（たすき）をつなぐランナーの活躍はもちろんですが、各区の中継地点まで選手を運搬・回収するサポート役も含



1区後藤君から2区西尾さんへの襷リレー

めたチームでの戦です。クラブ活動での研鑽だけでなく、日頃の専攻学習・寮生活を通じて仲間が増え、その信頼関係が活かされたものと感じています。

(水野英之)

ほ場の均平技術を学ぶ

1月21日（月）作物専攻の1、2年生14名が、技術修得支援事業の一環としてレーザーレベラーによるほ場均平技術について学びました。

今回の体験作業を行った水田は、8cm程度の高低差があり、代かき作業だけでは十分な均平が得られず、雑草発生の原因となっていました。

当日は、まず、メーカーの技術担当者から1時間程度、作業機の取り付け及び操作方法について説明を受けた後、ほ場にて作業体験をしました。



レーザーレベラーで均平作業を行う学生

ほとんどの学生は見るのも初めてでしたが、順調に 2 時間半ほどかけて 38 a の均平作業を完了することができました。

レーザーレベラーは、この 10 年間で急速に普及し、特に愛知県内での導入実績が多くなっています。

この技術を導入することにより、代かき作業が容易になり、除草剤の効果が上がり、水管理が容易になるほか、不耕起 V 溝直播栽培の安定に役立つ等の効果が期待できます。

1 年生には、今年、この水田での水稻栽培で、これらのメリットを確認してほしいと考えています。 (杉浦直樹)

東海近畿ブロックのプロジェクト発表会で最優秀賞を受賞

1 月 21 日～22 日に岐阜県で「東海・近畿ブロック農業大学校学生研究及び意見発表会」が開催され、自らの卒業研究や将来のビジョンについて発表が行われました。

参加した 9 府県の学生は、いずれも堂々とわかりやすい発表に加えて、質疑に対してもしっかりと受け応えしていました。

本校からは、研究発表の部に果樹専攻 2 年生の石口祐希君、意見発表の部に露地野菜専攻 1 年生の中村昌宣君が出場しまし

た。

審査の結果、石口君はみごと最優秀賞を受賞し、本校並びにブロックの代表として 2 月 19 日～21 日に東京で開催される「農業大学校等プロジェクト発表会・交換大会」に臨むこととなりました。

さらなる高みをめざして頑張ってくださいと願っています。

(山田利幸)



研究発表で最優秀賞を受賞した石口祐希君